

わたしの大学 —— 切磋琢磨のにぎやかさ

たなかよしゆき

わたしは第一次三十三期本科生。一九六九年十月入学。十九歳。前期は滝本明さん。後期は木澤豊さんがチューター（詩クラス）。滝本明さんは鋭敏な感覚と豊かな情操の持主でシヤイな性格。野坂昭如のようにサンクラスをかけてやや前屈みでぼそぼそしゃべっておられた印象。松原新一さんと二人誌「緑の狼」を出し、気鋭の詩人として注目されていた。木澤豊さんはムーミン谷のスナフキン。いつもパイプをくもらせておられた。宮澤賢治の愛読家で聡明でおだやかな印象。「航海者」という詩誌を出されていて、その同人達の月例会（読書会）が毎月ひらかれていた。本科修了後、わたしも「航海者」に詩を発表させていただき、読書会にも参加させていただいた。川端康成の『眠れる女』はその会で読んだが、この性と愛の深淵にふれた文学にまっこうから太刀打ちできず、「エロ爺の小説」と皮相な批評をしてしまったことがいまも悔まれる。我ながら浅薄な批評、恥しい。『眠れる女』は川端文学の傑作です。

本科修了後ほもぐりの学生（聴講生）となり、中西義明ク

ラス（小説）へ。中西義明さんは「変革者」という小説誌を出され、労働組合活動家でもあった。いつも目がきらきら輝いていて、笑顔が素敵なハンサムボーイ（とわたしにはみえた）。そのころの文学学校は独自の教室がなく、森の宮の労働会館や教員会館を間借りしていたが、いつも畳敷の教室は学生で満員。熱気でムンムンしていた。中西クラスには二〇名近い若者（中年も老年もいました）が在籍して熱かった。修了後、中西クラスの丸山美子さんとちと文学研究会「鬼」をつくり、明治の近代文学から、プロレタリア文学、昭和文学、戦後文学へと時系列に近現代文学を読み解く作業をつづけた。三、四年は続けたのではなかっただろうか。ガリバン刷りの月報もつくり、作品論も発表した。黒島伝治の『二銭銅貨』や『渦巻ける鳥の群』をめぐるのケンケンガクガクは忘れられない。椎名麟三の『深夜の酒宴』や梅崎春生の『桜島』、野間宏の『暗い絵』などの文学の深さはいまのわたしの骨格をつくってくれたとおもっている。

滝本明さんのクラスにいたころ、隣の詩クラスのチューター

1は右原彪さん。痩せた長身のダンディな紳士で、いつもきつちりネクタイを締め、落着いた気品ある織りのブレザーを着ておられた。ギロリとひかる大きな目玉をむき出したカマキリ神父という印象。右原彪さんとは数年ののち、わたしと森沢友日子ともひこさんも加わり、三人で詩誌「反架亜HANGER」を創刊することになる。彪さんは誠実であたたかな人。森沢友日子さんは七〇年代のおわりころまでチューターをされていたとおもうが、すぐれた詩の書き手。確か女性詩誌「ラ・メール」の新川和江さん、吉原幸子さんたちが編集した日本戦後女性詩人傑作選に数篇収められていたはず。『指あそび』がすぐれていた。

はなしは前後するが、七〇年はじめころ、斎藤憲治さんと知り合ったことも忘れられない。いつもフロイドやカフカ、ドストエフスキーについて熱っぽく語っておられた。「文学と思想の会」を主宰し、詩と小説と評論の同人誌「独楽」を出されたのもこのころ。わたしも誘われ、参加した。装丁は滝本明さん。明さんはコピーライターで、センス抜群。この表紙デザインはいまもわたしの気に入っている。その後、斎藤さんは失踪され、才能が埋もれたままになってしまったことが口惜しく残念でならない。

あのころのさまざまなひとびとの出会いや切磋琢磨が現在のわたし(全然大したことありません、ヘタな詩を五〇年書きつづけているだけ。)をつくってくれたとおもっている。

わたしの大学Ⅱ大阪文学学校。